

目 次

第5回学術大会 大会実行委員長挨拶.....	2
事務局からのお知らせ.....	2
プログラム.....	4-6
1 1月28日(金)学術大会1日目.....	4
1 1月29日(土)学術大会2日目.....	5
1 1月30日(日)ワークショップ.....	6
抄録.....	7-19
1 1月28日	
研究発表1~4.....	7
特別講演会.....	11
特別シンポジウム.....	11
パフォーマンス.....	12
1 1月29日	
研究発表5~9.....	13
講演会.....	18
シンポジウム.....	18
演舞.....	19
ワークショップ案内.....	20-22
1. 愛と信頼を育てるアサーション(自己表現).....	20
2. クリエイティブ・シンキング.....	20
3. メビウス気流法.....	20
4. ソウルダイナミックス~大いなる魂の連鎖~.....	21
5. 呼吸、子育て、スピリチュアリティ.....	21
6. ハワイアン・カフナ・サイエンス.....	22
アクセスマップ.....	23

第5回学術大会 大会実行委員長挨拶

松本 孚（相模女子大学）

第5回学術大会を相模女子大学で開催させていただくことになりました。第1回のテーマ「心の時代の学問を求めて」から始まり、第2回以降は、「男性性と女性性」、「父性と母性」、「青少年問題」、「教育的危機」、「心理療法」、「スピリチュアリティ（霊性）」、「仏教」などについて、これまでは主に個の内面のレベルから個を超えるトランスパーソナルな可能性を探ってきたように思います。今回は第5回という一つの節目を向かえ、今までと少し視点を変え、個の周りにある集団、社会、環境といったレベルからスピリチュアリティ（霊性）の意味やトランスパーソナルなアプローチについて考えていきたいと思えます。今私たちの社会は、親子間や家庭内の暴力、学校内におけるいじめ、職場におけるリストラ、いじめ、過労死、コミュニティにおけるホームレスいじめや無差別殺人、国家間の戦争、そして人間による自然環境破壊など、弱肉強食の世界が、あらゆるレベルで展開されているようにさえ見えます。そうした中で、おりしも相模女子大学は、今年の4月から学芸学部「人間社会学科」を開設いたしました。また選択科目ではありますが「トランスパーソナル学」も開講されることになっております。ともすれば、これまで対立や乖離しがちであった個人と社会が、スピリチュアリティ（霊性）を通して統合され超越されていくことを目指して、今回の大会テーマを「人間社会と霊性（スピリチュアリティ）」とさせていただきます。多くの方々のご参加を心より歓迎するとともに、参加者にとって本大会が実り多いものになりますよう希望しております。

事務局からのお知らせ

・学術大会・ワークショップ当日緊急連絡先 090-3876-3855

・JATP 第5回大会事務局・問い合わせ先

〒228-8533 神奈川県相模原市文京2-1-1

相模女子大学 学芸学部 人間社会学科 石川勇一研究室内

FAX 042-742-1696 Eメール jatp05@mail.goo.ne.jp

学会HP <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jatp>

・参加費の振込先

三井住友銀行 町田支店（普）7305762 JATP 第5回大会事務局 石川勇一

なお、参加費一覧は、プログラム22ページをご参照ください。

・大会当日の受付について

マーガレットホール1階/インフォメーションセンターにて行います。ご来場いただきましたら、はじめに受付にお立ち寄りください。当日の参加は大歓迎です。なお、クローク等はございませんので、お荷物は各自で管理していただくようお願い申し上げます。

・懇親会の受付について

28日夜の懇親会の受付も、開始直前までマーガレットホール1階/インフォメーションセンターにて行っています。会場は見晴らしのよいTea Lounge 2002（マーガレットホール2階）です。ふるってご参加ください。

・ワークショップの受付について

ワークショップの受付は、受付を終了したコースを除き、30日(日)当日の朝10時まで受け付けます。受付場所は、当日は8号館3階の834前で、28日・29日の学術大会中に申し込みは、マーガレットホール1階/インフォメーションセンターでおこないます。

・書籍販売コーナーについて

書籍販売コーナーを設けたいと思いますので、販売する書籍をお持ちの方は、あらかじめ事務局まで書籍を郵送または御持参ください。

・お食事について

28日(金)、29日(土)の学術大会では、マーガレットホール2階のcafeteria101をご利用できます。また、相模大野駅周辺から大学までの道のりに、たくさんのレストラン、コンビニ等がございますので、ご自由にお出かけください。

・ご休憩について

学術大会中(28日、29日)のご休憩は、マーガレットホール2階のcafeteria101をご利用ください。お飲物等は自動販売機をご利用ください。

ワークショップ期間(30日)は、834教室をご利用できます。

・禁煙について

学術大会で使用するマーガレットホールは全館禁煙となっております。ご協力お願いいたします。ワークショップ会場の1号館および8号館には、喫煙場所がございます。

・御宿泊について

会場の相模女子大学は、相模大野駅が最寄りの駅です。相模大野駅周辺や隣の町田駅周辺に多数のホテルがございますので、各自でご予約くださいますようお願いいたします。

【周辺ホテルの一例】

ホテルセンチュリー相模大野(相模大野駅ビル内) 電話 042-767-1111

相模原市上鶴間 3501-12 (<http://www.nexus-co.net/century-ono/index.cgi>)

ホテルサンエイト(相模大野駅徒歩1分) 電話 042-748-2600 相模原市上鶴間 3593-33

セントラルホテル町田(小田急町田駅より徒歩2分) 電話 042-720-3011

東京都町田市森野 1-12-15 (<http://www.worldark.com/travel/b-hotel/chm/index.htm>)

ホテルラポール千寿閣(JR町田駅南口前) 電話 042-749-1121

相模原市上鶴間 2800 番地 (<http://www.hotel-rs.co.jp/>)

・講師の先生方へ

講師控え室もご用意しておりますので、受付のものにお声をおかけください。

・予約参加の皆様へ

あらかじめご予約いただいた場合、予約料金にて参加できますが、まだご入金いただいていない方もおられます。大会当日に参加費をいただくことも可能ですが、その場合当日料金となりますので、早めに入金くださるようお願いいたします。

・その他

その他ご不明の点がありましたら、相模女子大学の腕章をつけた大会スタッフまでお気軽にお声をおかけください。

プログラム

11月28日(金) 学術大会1日目

会場：マーガレットホール4階 / ガーデンホール (学術大会は、この1会場のみで開催されます)

- 10:20 受付開始 (マーガレット1階 / インフォメーションセンター)
- 10:50 ~ 11:00 開会挨拶 松本 孚 (大会実行委員長・相模女子大学)
- 11:00 ~ 13:00 個人研究発表 (発表時間は質疑応答を含めて各30分)
(11:00 ~ 12:00) 座長 田中彰吾 (東京工業大学)
1. ポストモダンの実存 V. フランクルの実存分析への新たな展望
林 貴啓 (京都大学大学院人間・環境学研究科研修員)
 2. 気づきについての社会学的考察 ~ 東北タイの森の寺・スカトー寺へ向かう人々の姿から ~
浦崎雅代 (東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程)
- (12:00 ~ 13:00) 座長 吉村哲明 (弘前愛成会病院)
3. 身体感覚におけるアウェアネスと真理の様式
生方 薫 (東洋大学大学院文学研究科教育学専攻博士後期課程・関東福祉専門学校)
 4. <聴くということ>のエッセンスが濃縮されている内観面接
巽 信夫 (信州大学精神医学教室)・竹中哲子 (ひろさき親子内観研修所)・
真栄城輝明 (大和内観研修所)
- 13:00 ~ 13:30 理事会 (会場：第2本部棟 第4会議室、6ページ会場マップ参照)
- 14:30 ~ 15:30 特別講演会「内的成長社会への道 霊性と人生」
講師 上田紀行 (東京工業大学)
司会 土沼雅子 (文教大学)
- 15:45 ~ 17:30 特別シンポジウム
「相模のタベ 日常生活と霊性 (スピリチュアリティ) について語る」
シンポジスト 吉田節治 (相模女子大学) 「数学と霊性」
小柳茂子 (相模女子大学) 「女性と霊性」
岡 千曲 (相模女子大学) 「修験道と霊性」
司会 石川勇一 (相模女子大学)
- 17:45 ~ 18:15 パフォーマンス
メビウス気流法「舞も武道もコミュニケーション」
パフォーマー 坪井香讓 (メビウス気流法創始者) ほか
- 18:30 ~ 20:30 懇親会 (会場：マーガレットホール2階 / Tea Lounge 2002)

11月29日(土) 学術大会2日目

会場：マーガレットホール4階 / ガーデンホール (学術大会は、この1会場のみで開催されます)

10:00～12:30 個人研究発表 (発表時間は質疑応答を含めて各30分)

(10:00～11:30) 座長 安藤 治 (花園大学)

5. 死者との対話作業に関する2人の霊能力者の認識

吉野淳一 (札幌医科大学保健医療学部看護学科)

6. つなぐ存在としての シャマン 故俣野四郎医学博士の生涯を顧みて

戸田游晏 (妙龍寺・心理臨床家)

7. 「前世療法」の臨床心理学的検証 その実際と問題点の整理

石川勇一 (相模女子大学学芸学部人間社会学科)

(11:30～12:30) 座長 實川幹朗 (姫路獨協大学)

8. 人文死生学で転生輪廻を考える (1)

渡辺恒夫 (東邦大学理学部心理学研究室)

9. 神秘的体験を伴う精神病状態を経て、息子への虐待行為が消失した一女性例

吉村哲明 (弘前愛成会病院)

13:30～14:00 総会

14:00～15:00 講演会 「ドリーム-エンカウンター・グループ 世俗性と霊性」

講師 鈴木研二 (茨城キリスト教大学)

司会 安藤 治 (花園大学)

15:20～17:20 シンポジウム 「人間社会と^{スピリチュアリテイ}霊性」

シンポジスト 谷口隆一郎 (聖学院大学) 「家族と霊性」

尾崎真奈美 (東海大学) 「教育現場におけるスピリチュアル・ヘルス」

蛭川 立 (江戸川大学) 「権力と霊性」

川浦佐知子 (南山大学) 「エコサイコロジーと霊性 自然としての自己の目覚め」

司会 松本 孚 (相模女子大学)

17:30～18:00 演舞 「舞踊と元型...イサドラ・ダンカンのアプローチを通して」

演者 佐藤道代 (舞踊作家、イサドラ・ダンカン国際学校日本大使)

18:00 学術大会閉会の挨拶 松本 孚 (大会実行委員長・相模女子大学)

研究発表・シンポジウムでPCを使用する方へのお知らせ

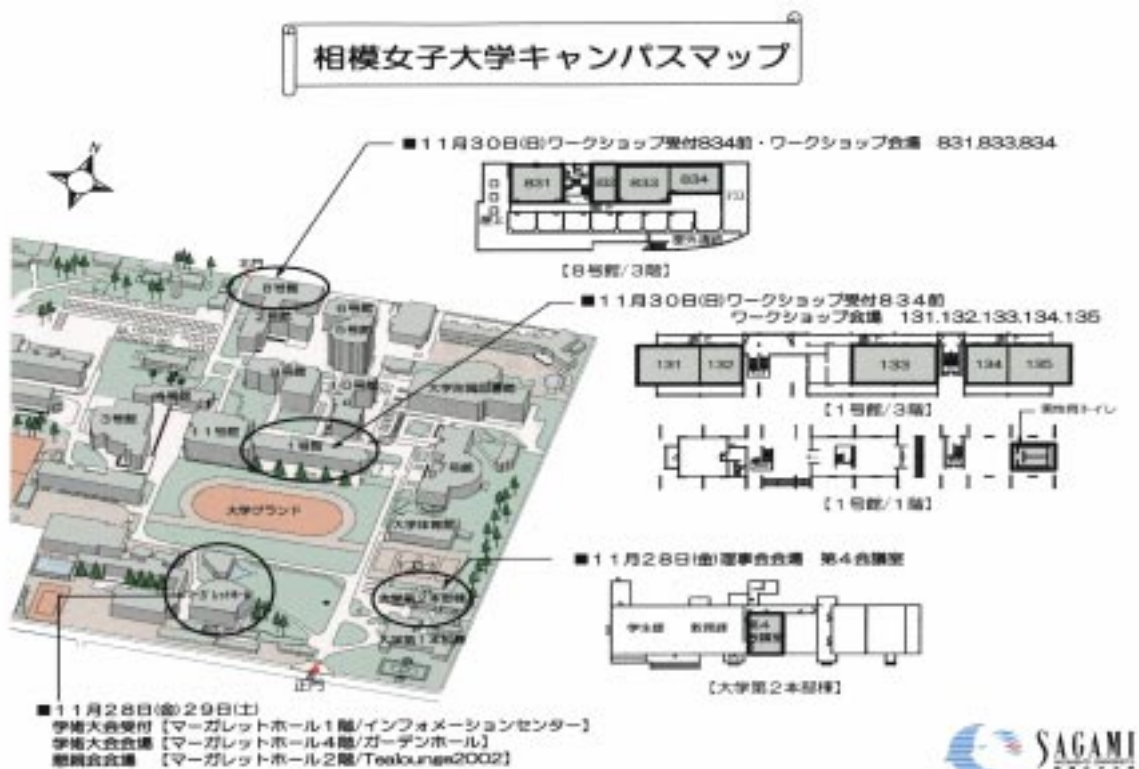
PC動作確認時間帯：研究発表者 初日は10:30～11:00、二日目は9:30～10:00

11月30日(日)ワークショップ

9:30 ワークショップ受付開始(8号館3階/834教室前)

10:00~17:00 ワークショップ

- | | |
|--|--------|
| 1. 愛と信頼を育てるアサーション(自己表現) | 1号館131 |
| 2. クリエイティブ・シンキング | 1号館132 |
| 3. メビウス気流法 | 1号館133 |
| 4. ソウルダイナミックス~大いなる魂の連鎖~ | 8号館833 |
| 5. 呼吸、子育て、スピリチュアリティ | 1号館134 |
| 参加人数によっては、836に変更になりますので、当日受付にてご確認ください。 | |
| 6. ハワイアン・カフナ・サイエンス | 8号館831 |



抄 録

11月28日 研究発表

【研究発表1】

ポストモダンの実存 V. フランクルの実存分析への新たな展望

林 貴啓（京都大学大学院人間・環境学研究科研修員）

「実存」の立場は、すでに過ぎ去った時代の思想として扱われがちである。しかし人々が自らの存在の意味を見いだせず、人間を根本から動機づける「意味への意志」が満たされない「実存的空虚」は、なお深刻さを増しつつある時代の病理である。本発表では、この「実存的空虚」、その根底にあるニヒリズムと正面から対決した精神科医にして思想家であるV. E. フランクルの「ロゴセラピー」「実存分析」の思想を、「ポストモダンの実存」のあり方を描き出したものとして再解釈し、その新たな可能性を探る試みである。

その際、視座は「建設的ポストモダニズム(constructive postmodernism)」に据える。これは通例「ポストモダニズム」と称される、フランス現代思想の流れ、「脱構築」の立場とは別の「ポストモダニズム」の流れであって、ホワイトヘッドやハーツホーンのプロセス哲学を主たる源流として、世界観と価値、そして霊性の「再構築」を指向するものである。いのちと意味に満ちた宇宙像や人間の生きた深い経験に立脚したもうひとつの「ポストモダニズム」の流れである。この流れのうちにはすでにホワイトヘッドの流れ以外にもさまざまな思想家が位置づけられているが、本発表はフランクルの実存分析の思想もまたこの思潮のなかに導入し、それを通じて「実存の再建」を企てることを企てる。

「実存的空虚」の淵源となるニヒリズムの世界観、すなわち還元主義との対決、自らも強制収容所の体験のなかで身をもって証立てた人間の極限的自由、「制約されざる人間」のあり方。人間の根本動機を「意味への意志」にみて、人間の本質的な「精神性」を肯定する人間観。建設的ポストモダニズムの典型的な主張とも通ずる、「生成」と「関係性」に依拠した人間の理解、そして人間の尊厳を擁護しつつも「人間中心主義」をあくまで斥け、人間の本来のあり方には「超越」の次元への関わりが不可欠と見たスピリチュアルな立場 - フランクルの実存分析・ロゴセラピーのこうした思想的論点に、「ポストモダンの実存」の可能性を見いだすことを、本発表は目指すのである。

【研究発表2】

気づきについての社会学的考察 東北タイの森の寺・スカトー寺へ向かう人々の姿から

浦崎雅代（東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程）

東北タイに位置する森の寺スカトー寺に、自分を見つめる旅に出かける日本人が増えている。バンコクから八時間もかけてたどり着くこの小さな寺には、15年前に出家した日本人僧がおり、自己探求する若者たちの心の水先案内人となっている。訪れた人の多くが、寺の持つ場の雰囲気や心の内面を見る修行、僧侶との関わりの中で癒され、自分自身の問題に向き合うようになることができたと感じている。

この現象は1995年頃から起こってきた。当時日本ではオウム真理教の事件や阪神大震災などが発生し、若者の精神的支柱のありかや日本社会の危機管理についての課題が露呈され、現代日本のあり方についての議論が交わされはじめた時期であった。

本発表は、このような背景を意識・無意識的にも背負った日本人がタイに向かっていく姿を通じた気づきについての社会学的な考察である。

筆者の調査および分析からは、気づきのポイントを自己探求と社会実践と捉えた。単に瞑想して自己探求を深めるだけでも、ただがむしゃらに社会的な実践を行うだけでも成長を自分自身で感じることはできない。「自己を見つめ、気づく」とことと「気づいて、実践する」ことを繰り返しながら自分自身が成長する実感を持つようになっていく。

また、そのような気づきを可能にしている条件に三つある。「場」と「人」と「瞑想」である。自然と人間生活とのバランスの取れた場、共に修行する仲間としての人、自分を見つめる手段としての瞑想は、気づきの重要な条件となると考える。

英国の社会学者アンソニー・ギデンズは、近代社会の特徴の一つに、時間と空間の分離を挙げた。近代以前の社会は、時間は空間（場所）と結び付けられて考えていたが、近代は、機械時計によって時間が均一になり社会的に管理されるようになったのである。すなわちそれは、現代社会に住む我々は、「今・ここ」に生きることがより困難な時代になってきていることを示している。

しかし、「今・ここを生きられない」というのは近代の特性ではない。人間は様々な思考によって過去や未来に囚われて生きている。ブッダはその囚われを苦しみと認識し、そこから脱する方法を瞑想という形で実践した。

グローバル化が進む今日、ギデンズを参考にするならば、「今・ここ」を生きるのはますます困難になっていくことだろう。近代化された社会の中で生きることの息苦しさを感じ、自己探求に関心を持つ人々はますますスカトー寺のような場を欲していくことだろう。このような現象は、単に疲れた先進国の人々が心を癒すために田舎を訪れるといった単純な構図では捉えられない深い問題意識を含んでいるのだ。

【研究発表3】

身体感覚におけるアウェアネスと真理の様式

生方 薫（東洋大学大学院文学研究科教育学専攻
博士後期課程・関東福祉専門学校）

身体感覚を重視するカウンセリング・教育的実践やボディー・ワークでは、注意を向けた身体のあるがままの知覚そのものや、そうした知覚の意味を概念化することによる気づき、そうした感覚に開かれることによるスピリチュアルな体験などさまざまな「レベル」や範囲におけるアウェアネス(awareness)が生じる。だが、このような主観的経験を科学として基礎づけることばかりでなく、あるがままの知覚、概念化による気づき、スピリチュアリティなどの微妙な経験の違いをそれぞれ異なる位相の真理として区別することはきわめて困難である。

チネン(Chinen, A.B., 1988)は医学の立場から、臨床医療において医師が直感的に体験するさまざまな種類の理解の仕方を、様相論理学(modal logic)的接近によって整理した。チネンが注目する様相論理学の諸様相は、実存(existence)、可能性(possibility)、必然性(necessity)などである。これらの様相から、客観的真理だけでなく主観的な真理を基礎づける様式として、表象的様式(representational mode)、解釈学的様式(hermeneutic mode)、存在論的様式(ontological mode)、実用主義的様式(pragmatic mode)などがあげられている。また、トランスパーソナル心理学・精神医学の認識論として、上述の様式の他に比喩的様式(metaphoric mode)と表示的様式(presentational mode)がおかれている(Chinen, A.B., 1996)。これらの様式から、あるがままの知覚は表示的様式における真理であり、概念化による気づきは解釈学的真理と捉えることが出来る。また、スピリチュアリティは比喩的様式における真理であろう。

現代心理学は「科学のメタファ論」から理論的な基礎の構築が進んでいる。トランスパーソナル心理学・精神医学においても理論的な基礎の構築が必要である。身体感覚という主観的体験について科学としての理論的基礎づけが可能であるか考察したい。

【研究発表4】

<聴くということ>のエッセンスが濃縮されている内観面接

巽 信夫（信州大学精神医学教室）

竹中哲子（ひろさき親子内観研修所）

真栄城輝明（大和内観研修所）

内観法は、浄土真宗の一派に伝わる身調べ法を母体とし、創始者吉本伊信により開発された、人間の根源的、普遍的な救いの法である。

その目的は、我執からの解放を通じ、命（いのち）の本源との高次の和解を促すところにある。

内観の具体的な方法や、心的転回の仕組み、及びその活用法については、すでに第4回大会で紹介した。

今回は、内観作業に際し、その介助を担う内観面接に焦点をあて、言及したい。内観の主人公は、あくまで内観者自身とされ、内観面接もこの原則を反映し、その手順は、きわめて簡潔かつ手短である。

この面接形態は、他の対話的精神療法に比べると、まさに特異的ともいえよう。だが、僅か1週間で劇的受容をもたらす内観のしくみにあって、この面接のもつ意義も看過できない。

内観の進みにつれ、次第に呼吸も深まり、安堵感、開放感、清明感に包まれるとともに、充足感、躍動感も内発されてくる。さらに、日常生活復帰後、精神的自律や能動性が発揮されるとともに、外界や他者に対する共感性や受容性のたかまるのが通例である。

このような、本来不可分に関わっている<こころ>と<からだ>、および<自己>と<他者>といった各領域間のエネルギーの循環と、その活性化こそは、まさに命の働きの実相を伝えるとともに、自我意識による拘束が、いかに命本来の活動の妨げともなっているかを裏づけてもいよう。

内観面接の意義も、この命の相のもとに照射してこそ、内実あるものとなろう。そこで、<命の世界に開かれた面接者の徹底した謙虚さと拝聴の姿勢こそが要であること>、さらに、<内観者と面接者との間に醸成される、言語的交流以前の相互活性的な磁場こそが、内観者の覚醒に貢献する>旨に焦点をあて述べてみたい。

そして、あらためて内観面接には、<傾聴力>のエッセンスが濃縮されていることを指摘したい。

特別講演会 「内的成長社会への道 霊性と人生」

司会 土沼雅子（文教大学）

講師 上田紀行（東京工業大学）

豊かな社会で、私たちはなぜか空虚感に直面している。モノは豊かだが、生きる意味が貧しい。それは目に見える、外的な成長のみを追い求めてきた帰結であった。今こそ内的成長社会への転換が必要なのである。

霊性 私たちが見えないつながりの中にあるということーは、私たちの内的成長にいかなる意味を持つのだろうか。私自身の歩みも振り返りつつ、霊性と地球社会の未来について語ってみたい。

特別シンポジウム 「相模の夕べ ^{スピリチュアリティ} 日常生活と霊性について語る」

司会 石川勇一（相模女子大学）

「数学と霊性」

吉田節治（相模女子大学）

明白な公理から論理構築され、感性の領域にある霊性とはかけ離れて見える数学だが、実は数学こそ最も霊性に支配される学問といってよいだろう。数学の究極は謎解き。謎の解明に必要なインスピレーション（霊性）を捜し求め、数学者はさまざまな仕方自己をとりまく"場"を変える。謎に没頭し、没我、瞑想、憑依、ときに夢の世界へ。この感性的な世界こそ、数学者が接している数学の世界である。過去の経験または未来の暗示から靈感を研ぎ澄まし、かすかなインスピレーションを得ようとする。私自身の体験などを交え、数学と霊性について語りたい。

「女性と霊性」

小柳茂子（相模女子大学）

「人生で生じるあらゆる事象は、自分が創り出している」このアカウントビリティの精神と、社会に根づく、女性への差別や偏見・暴力に対しては、はっきりとNOと言っていく、一見矛盾するようなふたつの側面が、実はメビウスの輪のようにつながっているのです。"女らしさ"のしほりから自由になって、"わたし"を生きる、女性のためのエンパワーメントについて話したいと思います。

「修験道と霊性」

岡 千曲（相模女子大学）

縁あって、出羽三山の荒沢寺で行われる「秋の峰」と呼ばれる修験道の峰入り修行に参加するように

なって二十年近くなる。このたび、霊性という観点から修験道を語るようにとのこと。出羽三山の位置する山形県には「山川草木悉皆成仏」の文字が刻まれた草木塔とよばれる石塔が多く見られるが、山川草木の自然にそのエッセンス＝霊性を感じ取り、伐採などでその命を奪わざるを得ないとき、これを供養する。修験的霊性といえないか。

パフォーマンス

メビウス気流法「舞も武道もコミュニケーション」

パフォーマー 坪井香謙（メビウス気流法創始者）ほか

舞は、舞手と大地、空間、そして観衆との交信、交流が大切。武道は敵対してくる相手との関係を一挙に融合したものに転じる中に技がある。これもコミュニケーション。

今回は、舞と武道（剣術と体術）の双方を、二十数年前に創めた無限記号状（ ∞ ） 精確には二重のメビウスの環状の動き（やわらげ）を基本にして披露します。これは武道の極意であり、一般のコミュニケーションの＜原型＞とも言えるでしょう。

パフォーマー略歴

1939年生。早大心理学卒。'81年メビウス気流法を創唱。国内、欧州各国、豪州で定期的に講習。教育、医療、スポーツ、宗教、芸術等各界の人々が参加。著書『気の身体術』（工作舎）『メビウス身体気流法』（平河出版）『創造する知・武道』（BAB出版）他。古武術と合気道を経て「ひかりの武」を創唱。（＜舞＞は佐藤響子他、＜武＞の受身は小川潔他）

11月29日 研究発表

【研究発表5】

死者との対話作業に関する2人の霊能力者の認識

吉野淳一（札幌医科大学保健医療学部看護学科）

はじめに：筆者は、平成5年から自死遺族の心情の聞き取りをはじめ、その調査内容を「精神的な問題を抱えた人々の自死と家族の喪の作業」として報告した。また、聞き取り作業を続けていく過程で同じ境遇なら遺族の体験を分かちあえると判断し、平成8年に自死遺族の会を立ち上げグループの適用について検証した。筆者は、成員の自死を経験した遺族の生きられた体験を聞いていく中で、遺族のみならず我々人間は生きているものだけでなく死者とも共に生きていることを知らされた。現在筆者は、生者が死者とも共に生きていることを証するひとつの行為は、死者との対話であると考えている。

我々人間は過去に亡くなった重要な人物と何らかの形で交流を続けている。物事に行きづまった時や窮地に立たされた時、感動的な現象に遭遇した時などに我々は、無意識に亡くなった重要な人物に語りかけたり何かをつぶやいたりする。この生きている者から特定の死者へ向けて発せられる声なき声は、生者から亡き者へのメッセージである。メッセージのやり取りは一方通行で終わらずに双方向となることもある。それは例えば、幻声や何らかの意味を帯びた形、色彩、気配、雰囲気などのサイン（兆候）を死者からのメッセージとして受けとめることであったり、また小動物や虫などを死者が姿を変えて現れたものとして意味づけることに象徴される。通常これらの体験は、ごく個人的で非科学的なものとして秘められ、他者に明かされたり共有されたりすることはまれである。筆者はこのように語られずに埋没している生きているものと死者との対話を、この世とあの世の意識的交流の一つとして位置づけ、再認識すべきと考える。死後も生死の境を越えて交流は続くという認識が一般的になることで、自死遺族はもとより亡くなった重要な人物にさまざまな思いを抱いている人々が癒されるのではないかと推測される。筆者は、この仮説の直接的な検証の前に、イタコ、神さま、霊媒などと呼ばれ死者の声や姿を自らの身体を通して一般の人々に提示してきた霊能力者に聞き取り調査を実施した。生者と死者の交流の仲介をしていることについての認識を明らかにすることがその目的であった。

対象：特定の死者の霊をこの世に呼び、その霊と対話するもしくは自らの身体を媒介にして死者に語らせることのできる霊能力者2名。方法：各々の霊能力者に面接し、生者と死者との対話を仲介していることについての認識を尋ねた。聞き取った内容はテープに録音した後、逐語録を作成して分析対象とした。結果：死者との対話をこの世で行うことは可能だが人智を超えたより大きな力のもとに行われるべきである、生者の死者への思いや祈りが死者の魂の状態に影響を与える、といったことなどが霊能力者の認識として明らかになった。

【研究発表6】

つなぐ存在としての〈シャマン〉 故俣野四郎医学博士の生涯を顧みて

戸田游晏（妙龍寺・心理臨床家）

こんにちの心の治癒現場では、一般的な教科書や解説書に記された理論だけでは対応がしにくい症例・事例が増えてきている。心身を併せ持つ全体としての人間観に立脚し、かつ現代の状況に適った治癒論と臨床家像が求められている。このような問題意識に基づき、著者はいわゆる「霊能」による治癒を行う人々の実践に興味を抱き、聴き取りと参与観察を用いた調査研究を行ってきた。

この方々との出会いの体験の中で、改めて著者が感銘を受けたことは、優れた霊能的治療を行う人々（シャマン）が、治療者としての自らをつねに問い直し、その治療の拠り所を自らの上位の存在とその守護に任せておられることである。現代のシャマン達もまた、科学的合理主義を健全とする現代社会と霊的世界との両界に生きている。現代人は、「科学」という一神教に精神 mind を染め上げられてしまった。だが、我々日本人の身体と魂の領域において、古来の〈かみまつり〉のころは未だ忘れ去られてはいない。この〈魂の世界〉の営みに深く関わる治療が、いま求められているのではなからうか。

科学的合理主義思想に基づく教育を受けてきた現代の心の治療者もまた、この責務をはたさねばならないのだと思う。そのためにはまず、自らを二つの世界に（社会と魂の領域・合理的思考と霊性・男性性と女性性・理論と臨床・・・等々）を共に生きそれらの統合をめざす、〈シャマン〉的存在と自らを認めていかねばならないと考える。

本発表においては、瞑想を用いた手技治療を実践した故俣野四郎医学博士との語らいを回顧し、現代の治療者〈シャマン〉の在り方への提言を試みたい。俣野四郎氏(1910～1999)は、理系研究者を父に持ち、当時の最先端の医療技術(心電図)の研究に携わる将来を嘱望された研究者で、誠実で熱心な臨床医でもあった。医学生の間より人間存在そのものを問わない医学に疑問を抱き、自ら瞑想をはじめた。戦争体験を経た後、方々からの要請を拒み、瞑想を中心においた生涯の中で、独自の心霊的手技治療が生みだされていった。氏は、常に「理屈にあわない」ことを排除しようとし、彼自身の体験を客観的事実として体験に供し、内外の文献研究に勤しんだ。このような氏の生涯とは、科学的合理主義を以て人間の霊性を追求し続けることで、本来根がひとつである双方に再び橋を架けようと試みたもののよう、著者には思われる。

霊性は心身をつなぐものであり、人間を全体としての本源的人間性への気づきへと導くものである。俣野氏の治療実践と研鑽の中に、根源的宗教(シャマニズム)発祥の原点を見ることができよう。俣野氏との語らいの中から、臨床家としての筆者が得たものははかり知れない。治療には自らを超えた守護がなくてはならず、治療者自らもまた、癒されていかねばならないのである。

【研究発表7】

「前世療法」の臨床心理学的検証 その実際と問題点の整理

石川勇一（相模女子大学）

前世療法とは、B・ワイスの『前世療法』（1988）によって広く知られるようになった催眠療法である。B・ワイスの手法は、催眠誘導によってクライアントを前世にまで退行させ、その人生での重要な出来事の記憶を蘇らせ、再体験することによって、今生での問題が解決したり、人生の意味を発見することをめざすというものである。

発表者は、一般的な折衷的心理療法を実践する中で、前世（イメージ）療法を一つの選択肢に加えてみたが、その後ずっと一体前世療法とは何かと考えさせられ続けている。前世療法はこれまで、学問的な議論や検証もほとんどされていない。今回は、以下の視点から前世療法を検証し、問題点の整理を行うこととする。

第一は、前世療法は心理療法なのかということである。当日は、前世療法の実際を示しながら、確立された心理療法との比較を行う。一般に心理療法の諸理論・諸技法とは、臨床心理学の知識を共通基盤としながら、その土台の上に、独自の治療目標、適応症、治療理論、治療過程の定式があり、さらに開かれた教育システムと研究システムによって成立しているのだが、前世療法ではこれらが適合しない。そのことの意味と課題を問いたい。これは、精神世界系や代替セラピー一般に通じる問題提起となろう。

第二は、催眠における偽記憶の問題である。B・ワイスは、明らかに催眠時における前世記憶を客観的なものとして扱っているが、これはどの程度信憑性のあるものだろうか。前世記憶の真偽問題と、その治療論的意味について考えたい。

第三は、心理的問題の原因が過去にあるという前提に基づく、因果論的治療観の問題である。今日の趨勢では、過去指向以外のセラピーの方がどちらかという盛んであるが、このような文脈における、前世療法の意味と、それを求める人々の心理について検討する。

第四に、心理療法における価値観の取り扱い方の問題である。過去生体験は、当然輪廻転生の上に成り立つものであり、輪廻は客観ではなく信仰の対象でしかない。それをセラピーの中にどのように持ち込むのかという点は、きわめて慎重でなければならない。

以上の視点に立った検証をふまえるならば、前世療法が「心理療法」であるためには、実践面においては、質が高く、開かれた教育と研究システムが整備されること、そして理論的には、「前世」をメタファーないし任意の文脈としてとらえ、イメージ療法の一種として相対化され、同時に還元主義に陥らない確固たる視座が据えられることが必要である。換言すれば、K・ウィルバーのいう「引き上げ主義」でも「引き下げ主義」でもない立場が必須である。このようなスタンスが厳格に貫かれてはじめて、前世療法が「心理療法」となる可能性、そしてトランスパーソナル学の根本問題としての輪廻問題に、多少とも寄与できる可能性が開かれてくるだろう。

【研究発表 8】

人文死生学で転生輪廻を考える（1）

渡辺恒夫（東邦大学理学部心理学研究室）

臨床死生学に対して、医療の枠組みに囚われない人文死生学が、最近提唱された（渡辺、2002）。その内容は人文諸学が関与する多様なものとなるが、ジャンケレヴィッチの一人称／二人称／三人称の死という分類を借りて、次のように置いてみるができる。一人称の死＝人文死生学／二人称の死＝臨床死生学／三人称の死＝生命科学

◎一人称的死生学の限界から「第二の誕生」の体験へ

一人称（＝自己）の死が未来形でしか語られえない以上、死の経験的考察は、「原理的に経験し得ない事態を経験的に了解可能にしよう」という矛盾を孕んだ企てになってしまう。突破口は、自己の「死」ではなく「誕生」の体験について考察することであり、それも、生物学的誕生ではなく、精神の誕生の瞬間の体験について経験的に考察することである。精神の誕生（＝第二の誕生）についての体験は、シャルロット・ピューラー(1923)によって「自我体験 Ich-Erlebnis」とよばれ、現在は日本の心理学者の手で調査研究が進められている。この体験は以下のような「問い」の形式を取る。

【事例 1】6歳か7歳位の頃、晴れた日の正午頃、2階の部屋にいて、窓からさしこむ日差しをボーッと見ている時に、私はどうして私なんだろう、私はどうしてここにいるんだろう、と思った。（19歳）

◎自我体験の問いの「解釈」としての「輪廻転生観」

筆者は、自我体験調査を続けているうちに、自我体験の問いの隠れた意味や論理構造を明らかにする（＝解釈）ことで、新たな死生観が切り拓かれると考えるにいたった。「問い」とは、その意味と構造が明確にされれば、必ずやその中に「答え」が見出されるものだから（人文学としての心理学の方法は、暗黙の意味や論理を明示化する「解釈」である。）

【事例 2】何歳頃かは覚えていないけど、よく思ったのは、なぜ今なのかということ。何千年も前から人間は生活していたはずである。/"りんね転生"ということがあるが、誰かの生れ変わりだとしたら自分が死んだ後、また誰かに生まれ変わるのだろうか。（21歳）

「なぜ今なのか」という問いから輪廻転生の考察へと移行する、展開の論理は何か。「なぜ20世紀の末が今であって江戸時代が今ではないのか」という問いへの可能な答えの一つが、「かつて私は江戸時代を今として生きていたのだが憶えていないのだ」なのである。なぜなら、生を享けるといふ偶然は何度も生起するとする方が、不条理感が減じるから。

◎結論：私は偶然、「今・ここ」にいる 偶然というものは何度も生起する 故に、私はかつて別な「今・ここ」に生きていたし、今後も別な「今・ここ」に生きるだろう。（このように明示化された転生輪廻説の正当性は、さらに哲学的論理的に検討されねばならない）

◎参考文献：渡辺恒夫『＜私の死＞の謎』ナカニシヤ出版、2002。

【研究発表 9】

神秘的体験を伴う精神病状態を経て、息子への虐待行為が消失した一女性例

吉村 哲明（弘前愛成会病院）

従来より、一過性の精神病状態が、病者に望ましい変化をもたらしうるということが知られていたが、トランスパーソナル心理学および精神医学の立場からは、Grof, S.らの「霊的危機(Spiritual Emergency ; SE)」あるいはLukoff, D.の「精神病的特点をもった神秘体験(Mystical Experiences with Psychotic Features ; MEPF)」といったカテゴリーが提唱され、望ましい変化を生み出す神秘的状態と精神病理とを区別する必要性が強調されてきた。

Grofらは、「霊的修行への深い関与」がSE発生の触媒として重要な働きをすることを指摘しているが、近年、我が国では伝統的霊的修行のほか、新宗教、宗教類似物、霊的治療法の隆盛が認められ、これらの実践を契機として発生したSEやMEPF類似の事例は相当数にのぼるものと推測される。しかしながら、国内におけるSEやMEPFの医学的報告は皆無であり、診断や治療をも含んだ専門的議論は全くなされてはいない。

今回著者は、神秘的体験を伴う一過性の精神病状態を経て、生後4ヶ月から約10年間にわたって続けられた息子への虐待行為が消失した一女性例を経験した。患者は急性期においては内的体験を言語化することができず、急性期後の回想によってSEによく合致する症例であることが明らかとなった。また、抗精神病薬の投与は「死と再生」のプロセスを阻害することなく、より安定したプロセスの完遂を可能にしたものと考えられた。

本発表では、まず、症例の臨床経過を報告し、その上で本例をGrofらおよびLukoffの研究と照合し、比較検討をしていくことで、従来の診断および治療上の問題点を明らかにする。次に、「変性意識状態誘発性精神病(Altered States of Consciousness Induced Psychosis)」などの発症契機に着目した臨床単位の可能性を提示し、これによって临床上のいくつかの問題を回避し、公正な臨床研究を進める方策を検討する。

講演会 「ドリーム－エンカウンター・グループ 世俗性と霊性」

司会 安藤 治（花園大学）

講師 鈴木研二（茨城キリスト教大学）

私は大学院生の頃からE・Gに参加する体験をもち、大学の教員になった20代後半からファシリテーターをしていた。若いときは3泊4日とか5泊6日の長丁場をこなしていたが、40を過ぎる頃から1泊2日でやることが多くなった。すると、なかなか深まらないときがある。それで、夢をもちこむことを思いつき、最近はおっぱらこれでやっている。

この講演では私の実施しているD - E・Gを紹介し、そこに働いている世俗性と霊性について見たいと思う。

シンポジウム 「人間社会と^{スピリチュアリティ}霊性」

司会 松本 孚（相模女子大学）

「家族と霊性」

谷口隆一郎（聖学院大学）

本講演では、システム論的家族布置（SFC）における私の経験および事例を挙げながら、「集団（家族）良心」「魂の和解」といった、SFCに特有の概念を手がかりに、家族布置を通して立ち現れる、家族構成員に流れ連なる力動としての「いのち=魂」について論じてみたい。「いのち」とは、始まりつつ終わり、終わりつつ始まるライフサイクルのダイナミズムであり、その全体性である。集団としての霊性、常に既に個から個へ、いわば横へ越え広がるいのちとその霊性について。集団良心と魂の和解の概念の人間関係や倫理への応用については、翌日のワークショップで実技演習を通して検証したい。

「教育現場におけるスピリチュアル・ヘルス」

尾崎真奈美（東海大学）

学技メンタルヘルスの危機的状況において、スクールカウンセラーとしての現状分析から、新たな視座、スピリチュアルヘルスを提言する。学技におけるスピリチュアルヘルスなアプローチとは、個々の生徒の問題を、存在論、実存論的な視点からとらえて解決を目指すものである。つまり、現実適応、表面的な人間関係の維持といった対処療法的な目的以上に、存在、現象、問題の意味を洞察することにより、いのち、あるがままの受容などを大切にする。

教育現場においては、意識化、言語化された実像を論理的に解決、指導していくという風土が見られ、スピリチュアルヘルスの概念にも抵抗がある。宗教アレルギーといった感情的反発も予想される。科学的説明を拒否するかのように見える、霊性、スピリチュアリティについて、教育現場から具体的方法論を紹介しながら、普遍的、客観的アプローチにせまりたい。

「権力と霊性」

蛭川 立（江戸川大学）

霊的、超越的、超個的などよばれる体験は、おそらく人間の自然な生活の一部であるが、その内容は高度に象徴的な言語－神話的な言語－によってしか語りえない。シャーマニズムにせよ－神教にせよ、およそ宗教的な体系は、神話的な語りによって構築されているが、それが文字として固定され、広く共有されるようになるほどに、体験それ自体を離れひとつの社会的な権力へと変質してしまう。近代的な思考はそれを嫌うあまりに、神話的な語りもその背後にある霊的な体験も否定してしまう。霊的な経験領域の豊かさを認めつつ、その象徴的な解釈に固執しないような体系は可能だろうか？ 仏教、とくに禅仏教の中にその可能性がみられるが、社会的な組織となった仏教の中でその可能性を実現することは難しいのも事実である。

「エコサイコロジーと霊性 自然としての自己 の目覚め」

川浦佐知子（南山大学）

人と自然のつながりを心理・精神的側面から考察するエコサイコロジーを介して、感覚、感性、感情を通して「全体」、「関係性」を見つめる「霊性」へのアプローチの可能性を検討。現象世界及び「人間性」への理解の深化がもたらす、霊性の目覚めを考える。

演 舞

「舞踊と元型...イサドラ・ダンカンのアプローチを通して」

佐藤道代（舞踊作家、イサドラ・ダンカン国際学校日本大使）

佐藤は彼女自身の最近の作品と、およそ百年前にモダンダンスの母：イサドラ・ダンカンが創った作品とを上演する。演目は、佐藤の作品として、チャイコフスキーの音楽と佐藤の友人で仏教者のバンテ・ウィマラの詩にインスピレーションを受けた「リバー・オブ・ライフ」、イサドラ・ダンカンの作品としては、ブラームス・ワルツ集の「愛の諸相」からの抜粋と、ショパンの「ナルシス」等を上演する。

演者略歴

モダン・ダンスに日本の身体言語を融合し、ユニバーサルな文化の元型を追求する舞踊作家。ニューヨーク大学より修士号及びダンス教育学科長賞を受賞。津田塾大学非常勤講師。イサドラ・ダンカン国際学校日本大使。道ダンス主宰。

ワークショップ案内

11月30日(日)

1. 愛と信頼を育てるアサーション(自己表現)

講師紹介：土沼雅子

文教大学人間科学部臨床心理学科教授、臨床心理士、TSS(心の談話室 Time-Space Spirit)主宰。精神科病院、クリニック、スクールカウンセラーを経て現在に至る。専門は人間性心理学、分析心理学、家族心理学、トランスパーソナル心理学。著書「夢と現実」(二期出版)、「人間性の深層」(共著、創元社)、「イメージの人間学」(編著、誠信書房)、「カウンセラーのためのアサーション」(編著、金子書房)、「イメージ療法ハンドブック」(分担訳、誠信書房)その他

内容：アサーション(assertion)とは、「自分も相手も大切にしたい自己表現」ということです。自分の感情、気持ち、意見、考え、信念などを、自分に正直に、しかも、相手の権利を尊重しながら適切に表現することなのです。アサーションを知り、アサーティブな生き方をすることによって、自他の境界を学び、自己信頼、他者尊重、個の確立という自己成長が促進されます。肯定的自己評価によって、人は、よい恋人、友人、親になることができます。アサーションはトランスパーソナル心理学の基本的課題ともいえます。講義と演習、ロールプレイなどによってすすめます。よろしく願いいたします。

2. クリエイティブ・シンキング

講師紹介：伊藤雄二郎

1960年東京生まれ。2001年、サイコシンセシスの理論と技法に基づくクリエイティブ・シンキングプロジェクトを立ち上げる。現在、同プロジェクトチーフコーディネーターとして、発想力を高める心理学的技法を開発、指導。インストラクターも養成にも携わっている。

内容：現在、世界は大きな転換点を迎つつあります。これからの時代は、予測できない状況の変化に対する対応力、新たな現実を創造するための発想力といった創造的に思考する力が求められる時代です。ではこうした能力を育むにはどうしたらよいのでしょうか？このワークショップではそのための具体的な方法論を 1、ヴィジョンを明確にする、2 質問を効果的に用いる、3、視点を切り替える、という三つのポイントに絞ってお伝えしていきたいと思えます。

3. メビウス気流法

講師紹介：坪井香讓(プログラム12ページ参照)

有川 清 1947年生。'77年坪井香讓のもとで 気流法の稽古開始。後、屋久島で有機農法等の活動

に携わる。12年前より千葉県流山市(現在は新松戸)で 気流法定期講習会を担当。現在相模原市知的障害者支援地域活動センター「フィルイン」で体育担当講師、同市障害者自立支援施設「シンフォニー」で身体ワーク担当。

朽名輝臣 早大文学部、東京医療専門学校卒。'83年より坪井香譲に師事し続ける。現在 気流法指導員として浦和等で定期講習会を担当。'92年アメリカ、'97年オーストラリアで ワークショップ。鍼灸師として東洋医学による癒しの道を横田観風師に学ぶ。

佐藤響子 気流法指導員。障害を持つ人々や不登校の子供達へのワークショップ、神奈川県立現代美術館でパフォーマンス等。国内他毎年定期的にヨーロッパ各国で 気流法講習を行い、また演劇舞踊等で多くのコラボレーションを重ねる。現在、豪州でアボリジニアアーティストと居住地で舞踊作品共同制作、出演(3年間のプロジェクト)。

内容：健康法、スポーツ、武道、芸術表現、瞑想、そして日常生活の中の何気ない身ごなし、これらすべてに通底する身心の動きの原則を<身体の文法>と想定。重力(重さ)に則して重力を最大に活かす法。最も基本的な絶え間ない生命活動の「呼吸」を身体内部からの大自然の声ととらえて呼吸を活かす法。気(プラナーと類似)を巡らし、また外へと放つリラックスと集中の法。これら全てをまとめる無限大()の動き<やわらげ>を行なう。

4 . ソウルダイナミックス ~大いなる魂の連鎖~

講師紹介：谷口隆一郎

哲学者であると同時に、ベルト・ヘリンガーが開発したトランスパーソナルなシステムズ・アプローチであるシステム論的家族布置療法(ソウルダイナミックス)を研究・実践している、日本で数少ないセラピストの一人。催眠療法士。

内容：ソウルダイナミックスは、家系的に起こる原因不明の心身の病気・不慮の事故・自殺企図・人間関係の問題等を、クライアントの原家族と前世代の家族との運命において生じる魂(命の連鎖)のもつれを明るみに出し紐解くことで、クライアントが家族布置の新たなイメージを持って前進して生きていくのを助けます。参加者は、自分の問題、自分の家族の問題、友人の問題、クライアントの問題に対してワークを受けることができます。採り上げる主訴の例として、精神病、様々な依存症、自殺企図、霊的危機、癌、家族との関係、パートナーとの関係(恋愛問題)、仕事上の人間関係等があります。

5 . 呼吸、子育て、スピリチュアリティ

講師紹介：井上ウイマラ

1959年山梨県生まれ。曹洞宗、ビルマのテーラワーダ仏教で出家して瞑想と仏教心理哲学を学ぶ。カナダ、イギリス、アメリカで瞑想指導に携わりバリー仏教研究所客員研究員を最後に還俗する。帰国後は瞑想を医療や教育、福祉などの現場に手渡す道を模索中。

内容：赤ちゃんが遊びの中で対象と関わるのを見守ること、おっぱいを噛まれたりしたときにどのように対応するかということは子育ての中で自分自身を見つめるための貴重な機会です。赤ちゃんの発達を促進する環境としての母親がさまざまな状況でどのような呼吸をしながら赤ちゃんに関わるかは、赤ちゃんにとって心のゆりかごのような雰囲気醸し出します。呼吸を感じる、呼吸に触れること、呼吸を使って話しかけたり会話したりしていることへの気づきをもとに、子育ての中にスピリチュアルなスペースを開くことの意味深さを探求します。

6 . ハワイアン・カフナ・サイエンス

講師紹介：守谷京子

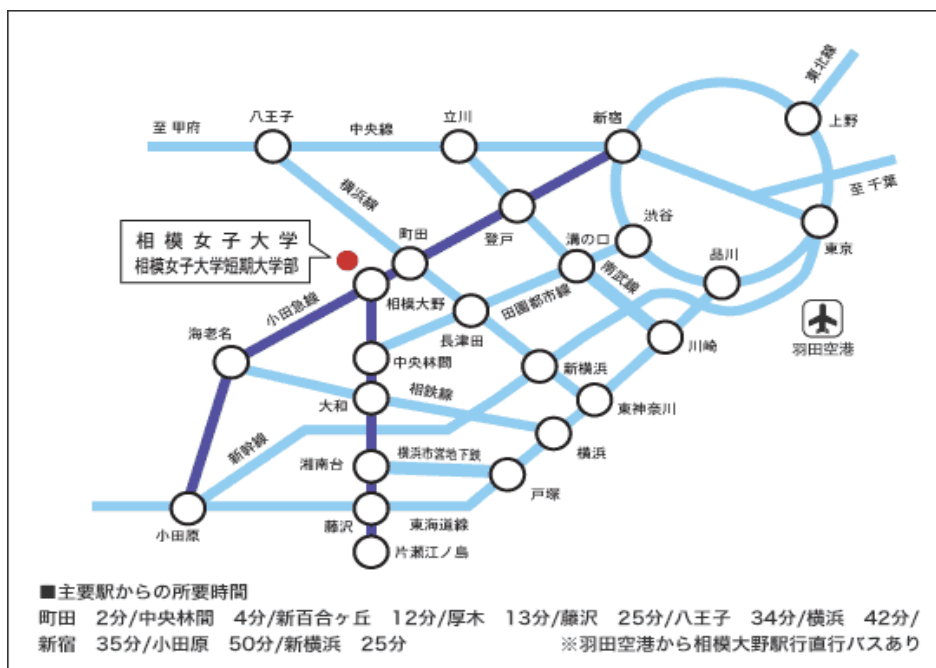
I.P.G (インスティテュート・オブ・パーソナルグロース) 所長。上智大卒。ゲシュタルト・セラピスト養成コース卒業。スタニスラフ・グロフ博士の第一期プレスワークセラピスト資格取得(米)。日本トランスパーソナル心理学/精神医学会、日本人間性心理学会、世界心理療法評議会、ゲシュタルト・セラピー促進協会(米)のインターネット・ジャーナルの各会員。古代ハワイ人の智慧とゲシュタルト・セラピーを統合したカフナ・サイエンス協会ジャパンの会長。イオンド大学(米)より心理学名誉博士号、国際学士院(米)より Fellow of International Academy of Education を授与。

内容：カフナ・サイエンスは、人間性を取り戻すべく、古代ハワイの伝統的智慧和ゲシュタルトセラピーを中心とした現代のサイコセラピーとの統合で生まれたセラピーです。「今、ここ」に生き、物の本質を見出し実行し、自己変容していく点で「ゲシュタルトセラピー」と古代ハワイの智慧には共通性があります。踊りの型により調和と均衡の法則に気づくようになります。

参加費 (ワークショップのみの参加も可能です)

		学術・一般会員	非会員	学 生
学術大会 (2日通し)	予約	5,000 円	7,000 円	3,000 円
	当日	7,000 円	9,000 円	5,000 円
学術大会 (1日のみ)	予約	3,500 円	5,500 円	2,000 円
	当日	5,500 円	7,500 円	4,000 円
懇親会 (28日夜)	予約	4,000 円	4,000 円	3,000 円
	当日	5,000 円	5,000 円	4,000 円
ワークショップ (30日)	予約	8,000 円	10,000 円	5,000 円
	当日	10,000 円	12,000 円	7,000 円

・小田急線相模大野駅までのアクセス



・相模大野駅から大学まで



